

御苑生の

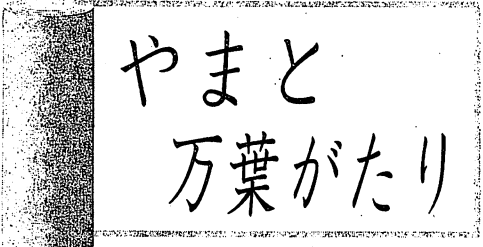
百木の梅の 散る花の

天に飛びあがり 雪と降りけむ

大伴書持(巻一七・三九〇六)

早いもので令和も5年目、元号にもすっかりなじんできました。当時話題になったように、「令和」は万葉集巻五に載る大伴旅人が催した梅花の宴における序文から採られた2文字です。万葉集の編者とされる大伴家持は大伴旅人の子で、家持の弟が今回の歌の作者書持です。

この歌は題詞に「大宰の時の梅花に追和する新しき歌六首」とあり、天平2(730)年正月の梅花の宴での歌32首に追和したものです。左注によると10年後の天平12年12月9日の作で、まだ梅の時期には早いのですが、雪を見て思い立ったのかもかもしれません。この歌は父旅人の10



年前の歌、「わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも(私の庭園に梅の花が散る。はるかな天から雪が流れてくることよ)」(巻五・八二二)を承けたものです。大宰帥として赴任した大伴旅人は、神龜5(728)年、同行していた妻を亡くします。梅花の宴を開いた

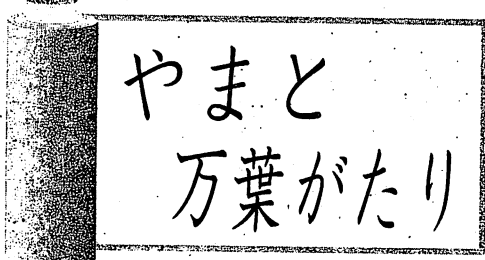
天平2年の暮れ、任を大宰府に行く以前、妻が奈良の家に梅を植えていたことがわかりました。梅は旅人夫妻にとって思い出の木でした。それは子供たちの心にも残っていたのか(巻三・四 五三)と詠んでおり、天平2年にまだ少年

だった家持と書持は梅花の宴で歌を残してはいません。宴の10年後に書持が、20年後に家持が追和する歌を詠んでいます。また2人も梅と雪を取り合わせた歌を残しています。旅人は天平3(731)年に亡くなり、2人の歌を知ることはありませんでしたが、梅をめぐる家族の絆が垣間見えるようです。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

【訳】御苑のたくさんさんの梅の木の落花が、天に飛びあがり雪と降ったことだろうか。

君なくは なぞ身装はむ 匣なる 黄楊の小櫛も

2月22日は「猫の日」です。猫の鳴き声の「ニャン、ニャン、ニャン」にちなむそうです。「犬の日」は「ワン、ワン、ワン」の11月1日だそうです。イエネコはリビアアマネコが家畜化されたものといわれ、日本列島にやってきたのは奈良時代以降のことと考えられていましたが、兵庫県姫路市の見野古墳群から見つかった6世紀ごろの須恵器にイエネコの足跡が残っていたことから、その頃には飼われていたらしいことがわかりました。さらに、長崎県香岐市のカラカミ遺跡からはイエネコの骨も見つかり、弥生時代にはすでに日本に入ってきていたようです。



取らむとも思はず

姫路市は古代には播磨国と呼ばれていた地域で、播磨国府も現在の姫路市内に置かれていました。この歌は、都から国守として赴任していた石川君子が大和へ帰るときに、当地の女性が詠んだ歌です。あなたがいればこそ身だしなみを整えて会いたいと思うけれど、愛しい人がいなく

【播磨娘子 巻九・一七七七】

なってしまうたら、櫛を手に取って髪をとくこともしようとは思わないのだと詠んでいます。別れのつらさが表現されています。現代では櫛よりもブラシを使う人が多いかもしれませんが、クシゲとはもともと【訳】あなたがいなくてどうしてわが身を装いましよう。匣に大切にしまおう黄楊の小櫛も手に取ろうとは思いません。

櫛専用の入れ物のことですが、現代でいう宝石箱のような、貴重品を収納する小箱のことという意味でした。

亡き愛猫が、私にだけはおごんで毛をとかせてくれていたことを思い出します。黄楊の櫛には到底及ばない廉価品の猫用櫛ですが、彼女がいなくなると今は我が家の宝物です。(県立万葉文化館 企画・研究係長・井上 さやか)